

2013年の放送界概観

片野 利彦*

本稿では、1953年の放送開始より「還暦」という節目を迎えた、2013年の放送界を概観する。

◆ドラマの隆盛

新語・流行語大賞（「現代用語の基礎知識」選）のトップに選ばれた4語のうち、2つがテレビドラマから生まれた言葉（「倍返し」「じぇじぇじぇ」）だったことは、何かと存在感の低下を指摘されがちなテレビが、現在でも社会現象の発端となり得ることを示す象徴的な出来事といえるだろう。TBS系の『半沢直樹』は、最高視聴率が42.2%（9月22日放送の最終回）に達し、平成に放送されたドラマのトップを記録することとなった。堺雅人演じるサラリーマン、半沢の会社組織での奮闘ぶりは、決め台詞「倍返しだ」とあわせ、受け手を共感させる痛快な生き様を見事に描いていた。NHKの連続テレビ小説「あまちゃん」は、1980年代の世相と3.11後の現代とを対比しつつ、アイドル文化と地方都市の日常を織り交ぜたテンポの良い演出、軽快なBGMなどとともに、朝の茶の間に彩りを添えた。平均視聴率は20.6%だったが、東京ドラマアウォード2013で7冠を獲得、また、関連グッズも異例の点数の多さで展開されるなど、広範な盛り上がりを見せた。

◆番組終了と視聴率

ヒットドラマがテレビの底力を見せた一方で、“長寿番組”の終了発表も相次いだ。2014年3月に、フジテレビの「笑っていいとも!」、TBSの「はなまるマーケット」が終了することが、それぞれ生放送中の番組内で発表された。単独司会者による生放送番組としてギネス記録も持つ「いいとも」は、1982年に放送を開始。フジテレビが“楽しくなければテレビじゃない”とのキャッチフレーズを掲げた80年代から続いた同番組は、32年でその幕を下ろすこととなった。「はなまる」は、1996年に主婦向けの生活情報番組としてスタート。同時間帯のワイドショーとは一線を画す内容が、長きにわたって支持を集めていた。

背景の1つに、視聴率の低下というテレビ界全体の傾向が指摘できるかもしれない。フジテレビでいえば、2004年から7年連続で「全日」（6時～0時）、「ゴールデンタイム」（19時～22時）、「プライムタイム」（19時～23時）の3つの時間帯を制覇していたが、2013年は3位となっており、近年は人気ドラマやバラエティーの安定的なヒットで隆盛を誇るテレビ朝日と、日本テレビが1位を争っている。「はなまる」にしても、終了の理由として視聴率の低迷がTBSにより挙げられている。

他方、キラーコンテンツの定番であるスポーツ中継は、2013年も多くの人々を熱狂させた。野球では、ワールドベースボールクラシックが第3回となる今大会でも注目を集め、日本戦の試合は

*かたの としひこ 一般社団法人日本民間放送連盟 番組部

いずれも 30%を超える視聴率を記録した。また、楽天と巨人によるプロ野球の日本シリーズは第 7 戦までもつれ、こちらも大いに盛り上がりを見せた。特に、楽天の本拠地である仙台では、楽天が優勝を決めた第 7 戦の平均視聴率が 44.0%（関東地区は 27.8%）と、被災地に明るい話題を提供することとなった。

サッカーは、ワールドカップブラジル大会への出場を日本が決めたアジア地区予選の対オーストラリア戦が 38.6%と、好調のテレビ朝日への更なる追い風ともなった。

◆放送 60 周年

還暦という節目を印象付ける企画として、NHK と日本テレビが 2 月に放送した「60 番勝負」が挙げられよう。秘蔵映像による対決、相互の若手スタッフの“交換留学”、24 時間以内でのドラマ制作といった企画からなる両局の共同制作バラエティーで、視聴者との双方向機能も実装し、テレビというフォーマットを活かした意欲的な試みに満ちた番組となった。

放送電波では、象徴的な“世代交代”があった。2013 年 5 月 31 日、その前年に開業していた東京スカイツリーは、1959 年からテレビの電波送信の役割を担っていた東京タワーより、その任を引き継いだ。受信環境の改善がスカイツリー建設の目的だったが、この切り替えに伴い、テレビが映らなくなる受信障害が新たに起こる恐れが判明。2012 年末より、NHK、民放をあげた受信確認テストが度々繰り返され、5 月の移転につながった。

60 周年を迎えた放送は、しかし新たな技術革新にも挑んでいる。2020 年の東京五輪開催が決まったこともあり、デジタル放送をより高画質化した 4 K、8 K といったスーパーハイビジョンの開発、実験が進められている。また、NHK では、インターネットと放送を融合させたハイブリッドキャストが 9 月より始められている。

◆ラジオの動向

ラジオも大きな転換期を迎えている。テレビのデジタル化により空いた周波数帯の活用の一環として、主に都市部での難聴対策や高音質化を目標に、アナログラジオのデジタル化がかねてより検討されてきた。しかし、巨額の設備投資などの負担は大きく、NHK の参入も見込めないことから、民放内での結論は一致せず、全局一斉での取り組みは見送られることとなった。デジタル化によるマルチメディア放送の検討を続ける社がある一方、AM 放送の難聴対策に、より電波の届きやすい FM 波の利用を求める社もあり、今後は各社のニーズや経営判断などにより、様々な方向性が予想される。

◆NHK の動向

2012 年から受信料の値下げを進めてきた NHK。減収が見込まれていたものの、受信料回収などの活動にも力を入れた結果、受信料収入は 6387 億円と、前年度比 13 億円の減少に抑えられた。2013 年でも、契約件数が過去最高の 3849 万件に達するなど、営業活動の強化が奏功しているものとみえる。

その一方で、職員の高給を指摘する声などを受け、新給与体系の導入が NHK 労組に示され、労組側も最終的にこれを受け入れることとなった。新たな体系のもとでは、基本賃金の総額を、今後

の約5年間で10%削減することとなった。

NHK 経営層に目を転じると、6月、安倍晋三首相が経営委員会の委員長に浜田健一郎氏を再任させた。11月には、経営委員会の新委員に、首相に近い人物とも言われる作家の百田尚樹氏、日本たばこ産業顧問の本田勝彦氏、保守派の論客としても知られる埼玉大学名誉教授の長谷川三千子氏などが選任され、安倍カラーの鮮明な人事に、今後のNHKの報道姿勢や動向が注目されている。

2013年末には会長人事も話題となった。2014年1月での任期切れによる退任を表明した松本正之会長に代わり、日本ユニシス特別顧問の榎井勝人氏が新会長に就任することが、12月20日の経営委員会で全会一致で決定した。榎井氏は、会見で政権に対するNHKの自立性を問われ、「よりどころは放送法。そこに乗っていれば誰にも文句は言われない」と答えた。政治との関係が取り沙汰されがちなNHKを今後どう運営していくか、その手腕が問われる2014年となりそうだ。

◆不祥事関連

放送に絡む不適切な演出や不祥事などでは、以下のような事例があった。

TBSの朝の情報番組「みのもんたの朝ズバッ！」では、司会のみこの氏の次男が9月に窃盗未遂容疑で逮捕されたことを受け、番組出演を自粛。その後、10月には同社の番組の降板が発表された。同じく情報系では、日本テレビの「スッキリ!!」で、インターネットを使った詐欺の特集中、被害者として紹介された人物が、実際は被害者ではないことがわかり、番組内で謝罪、訂正があった。

バラエティー番組では、フジテレビの「ほこ×たて」で、出演者らの対戦の順番が実際とは異なっていたなど、計6件の不適切な演出が明らかとなり、番組が打ち切られることとなった。12月末には、担当役員やプロデューサーらの処分が公表されている。同じくフジテレビの「FNS27時間テレビ」では、暴力的な場面や危険行為、また、性的な演出などについて、BPOの青少年委員会が、「人間の尊厳」「公共の善」を意識して番組を作るよう求める声明を公表した。TBSでは、新番組の「マツコの日本ボカシ話」が、「表現・演出方法が局の内規に抵触する恐れがある」として、放送1回で打ち切りとなった。

また、テレビ朝日では、社員が番組制作費約1億4千万円を流用し着用していたとして懲戒解雇された。

